

(書式1)【候補者用】

① 立候補者の 姓名と所属	蒲生昌志 国立研究開発法人産業技術総合研究所
② 立候補の理由と 抱負 (400 字程度)	<p>2年前に役員選挙に立候補した時、私は『「リスク学」が独自に持つ価値(各専門分野とは異なる価値)は、社会が新しいリスクに直面した時に、断片的で不確実な情報を束ね、リスクへの対処を誤らない道筋を描くことにあるのではないか(中略)学会として「道筋を描く」行為にどう価値を見出すか、そのために満たすべき要件は何か、適切な発信はどうあるべきか、何らかの仕組みができないかなど、皆さんと一緒に考えたい』と書きました。</p> <p>この2年間、表彰担当理事として活動し、「グッドプラクティス賞」を立ち上げました。本賞の趣旨や特徴は学会 HP の記事等に譲りますが、まさに『「リスク学」が独自に持つ価値』に迫るものであると考えています。なかなか2年前の志の通りとはいきませんが、グッドプラクティス賞を学会に根付かせる活動を行いながら、少しでもそれに近づいていきたいと考えています。</p>
③ 本学会における 活動歴	<p>【学会賞】 1996 年度 学会論文賞</p> <p>【学会誌】 岡、蒲生、中西 (1997) Risk/Benefit Analysis of the Prohibition of Chlordane in Japan: An Estimate Based on Risk Assessment Integrating the Cancer Risk and Non-cancer Risk、日本リスク研究学会誌 8(2):174-186 蒲生 (2010) 社会の意思決定を支えるリスク評価へ、日本リスク研究学会誌 20(3):189-195 蒲生 (2021) 日本リスク学会グッドプラクティス賞、リスク学研究 31(1):1-2</p> <p>【年次大会・シンポジウム】 蒲生 (2010) 「意志決定の社会ニーズに応えるリスク評価へ」第 23 回シンポジウム、東京 蒲生 (2016) 「環境化学物質のリスク管理から見たものさし」第 29 回年次大会、大分</p> <p>【学会役員】 第 17 期役員 (2020.7~2022.6) : 表彰担当理事</p>
④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)	1996 年 工業技術院資源環境技術総合研究所入所。独法化により産業技術総合研究所、現在に至る(安全科学研究部門 副研究部門長)。NEDO や経産省のプロジェクトにて、化学物質やナノ材料のリスク評価の研究に従事してきた。

(書式2) 【推薦者用】

① 推薦する候補者名	蒲生昌志
② 推薦者の姓名と所属	岸本充生 大阪大学データビリティフロンティア機構
③ 推薦理由 (400字程度)	<p>本氏は工業技術院を経て産業技術総合研究所に至るまで一貫してリスク評価の研究を行っている。大学院時代に実施した、シロアリ防除剤の代替のリスクトレードオフ評価は、発がんとは非発がんという異なる種類のリスクの大きさを定量的に比較する方法を開発したもので、その後の様々なリスクトレードオフ評価の先駆けとなった。異なる種類のリスクのトレードオフは、東日本大震災においても、新型コロナウイルス感染症においても、リスク問題に伴い必ず現れる課題である。近年では、工業ナノ材料のリスク評価に従事し、科学的知見が少ない段階から、政策に役に立つリスク評価を戦略的に実施していくという、広く新規科学技術全般に通じる課題にも取り組んできた。また、Society for Risk Analysis (SRA)の年次大会においても参加・発表の回数は会員のうちでもトップクラスであり、リスク学の世界の動向についても詳しい蒲生昌志氏に引き続き、理事として、日本リスク学会にアカデミックな知見をインプットし、リスク学の発展をリードしてもらうために推薦する。</p>